

# アンダーワールド:エボリューション

2006(平成18)年3月9日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★



監督・原案・製作総指揮＝レン・ワイズマン／出演＝ケイト・ベッキンセル／スコット・スピードマン／トニー・カラン／シェーン・ブローリー／スティーヴン・マッキントッシュ／デレク・ジャコビ／ビル・ナイ (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給/2006年アメリカ映画/106分)

## 第1章

あなたは  
何本見た？

……「アンダーワールド」の世界で争うヴァンパイア(吸血鬼族)とライカン(狼男族)の抗争第2弾は、第1作と同じく相手の生き血を吸うことによって力をつけたり、死んだ人間が狼男として復活したり、淡泊な日本人には不向きな西洋流の抗争……？ またそのメーキャップのため余計に人物と名前が一致しないうえ、その物語は複雑で難解。そこで物語の理解はさておき、圧倒的に女性上位に描かれているヒロインの活躍ぶりに注目するのも1つの見方……？ そのカッコよさはあの『バイオハザード』(02年)のミラ・ジョヴォヴィッチと同じ……？

## 「アンダーワールド」の世界は？

アンダーワールドとは人間(人類)の世界ではなく、その下(?)にあるヴァンパイア(吸血鬼族)とライカン(狼男族)の世界のこと。第1作『アンダーワールド』(03年)は6世紀前のアンダーワールドを舞台として描いた映画で、パンフレットによると、その時代、ヴァンパイアはライカンを奴隷にして昼の守護者をさせていた。ライカンの君主ルシアンと許されぬ恋に落ちたヴァンパイアのソーニャを、彼女の父でヴァンパイアの指導者であるビクター(ビル・ナイ)が処刑。この事件を機に、ヴァンパイアとライカンの種族間闘争が始まった。その後、家族をライカンに殺されたセリーン(ケイト・ベッキンセル)は復讐のため、ヴァンパイアの闇の処刑人となったというお話。ああ、ややこしい……？

## アンダーワールドとアンダーグラウンド

日本でも私の学生時代には、アングラすなわちアンダーグラウンドという言葉がはやり、各地でアングラ劇団が活躍していたが、今はそんなマイナー集団はかっよく思われなくなったためか、激減している様子。

しかし西洋人は、ヴァンパイアとライカンが大好き(?)なようで、日本人には全然なじみのないこれらの種族が登場する物語は、再三映画化されている。本作は前作に続いて、ヴァンパイアとライカンの「抗争」を描くもの。しかしこの映画も、ヴァンパイア族とライカン族に大きく2分類したうえで、人物関係図を整理しておかなければ、日本人のあなたには理解困難では……? そのうえ、本作ではセリーンと禁断の恋(?)に落ちる歴史上初の混血種であるマイケル(スコット・スピードマン)が登場!

## 「美しき戦士」あれこれ

ここで、ややこしいストーリーは横に置いて、この映画の主演であるヴァンパイアの闇の処刑人セリーンを演ずるケイト・ベッキンセールの「美しき戦士」ぶりに注目してみよう。「美しき戦士」は、日本でも上戸彩が太ももを大胆に見せながら演じた『あずみ』(03年)、『あずみ2 Death or Love』(05年)(『シネマルーム7』362頁参照)があり、また中国映画では『グリーン・デスティニー』(00年)、『レジェンド 三蔵法師の秘宝』(02年)(『シネマルーム7』336頁参照)、『シルバーホーク』(04年)のミシェル・ヨーなどたくさんいる。

そしてハリウッド映画では、『バイオハザード』(02年)(『シネマルーム2』235頁参照)、『バイオハザードII アポカリプス』(04年)(『シネマルーム6』300頁参照)のミラ・ジョヴォヴィッチや、『トゥームレイダー』(01年)、『トゥームレイダー2』(03年)(『シネマルーム3』278頁参照)のアンジェリーナ・ジョリーそして『エレクトラ』(05年)(『シネマルーム7』359頁参照)のジェニファー・ガーナーがいる。『チャーリーズ・エンジェル』(00年)、『チャーリーズ・エンジェル フルスロットル』(03年)(『シネマルーム3』274頁参照)の3人の女戦士もそうだし、またクエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル〜

KILL BILL ～ Vol.1』(03年)、『シネマルーム 3』131頁参照)、『キル・ビル～ KILL BILL ～ Vol.2』(04年)、『シネマルーム 4』164頁参照)のヒロインを演じたユマ・サーマンもそうだ。男にとっては、とりあえずこの「美しき戦士」を堪能できるだけで一応は満足……？

## ケイト・ベッキンセールの女戦士ぶりは？

セリーンに扮するケイト・ベッキンセールは、この映画ではヴァンパイアとして生き血を吸ったり、自分の腕の血をマイケルに吸わせてやったりと、ケツタイなシーンがたくさん登場するが、そのアクションはやはり一流の「女戦士」と評価できるもの。そして、こんなヴァンパイア映画には珍しく(?)、まともなマイケルとのラブシーンも少しだけ……？

## 女優ケイト・ベッキンセールは？

このケイト・ベッキンセールは『アビエイター』(04年)にエヴァ・ガードナー役として登場したが、アカデミー賞最優秀助演女優賞をキャサリン・ヘップバーン役を演じたケイト・ブランシェットが獲得したことでわかるように、明らかにケイト・ブランシェットより格下に扱われていた女優(『シネマルーム 7』12頁参照)。しかし、第1作の『アンダーワールド』に続いてこの映画にも主演し、また『ヴァン・ヘルシング』(04年)でもカッコいいアナ王女役で登場している(『シネマルーム 6』22頁参照)。ヴァンパイア映画ばかりに起用されるのはあまりよろしくないと思われるが、この映画での主演を足がかりに、さらにステップアップしてもらいたいものだ……。

## 「ファンタジー」・ヴァンパイアと「リアリティ」・ヴァンパイア

ヴァンパイアはヨーロッパ社会においては一般的な存在(?)だが、「十字架を見せると畏怖するような、宗教的な吸血鬼に興味はないんだ」と語るレン・ワイズマン監督は、「昔の映画や伝説に出てくるのは、『ファンタジー』・ヴァンパイアだと思う。だが、僕が創造したのは、もう少し科学的根拠に基づいた『リアリティ』・ヴァンパイアなんだ」と述べ、「ファンタジー」・ヴァンパイアと「リ

アリティ」・ヴァンパイアを明確に区別している。

この映画でも、それまで縦横無尽の活躍をしていたセリーンが、夜明けを迎え太陽の光を浴びると身体に異変が起こってくるというヴァンパイア本来の「宿命」を背負っているものの、血液の「ある力」によってその傷が癒え、マイケルと濃厚な(?)ラブシーンを展開できるまでに回復することになる。さらに史上初の、ヴァンパイアとライカンの混血であるマイケルも、血液の「ある力」によって奇跡の復活を……。これぞ科学的根拠にもとづいた「リアリティ」・ヴァンパイアと言わずして何としよう……？

### 美術監督や衣装デザイナーは大変だが……

「美しき戦士」は、できるだけ素のままの美しさをアピールしたいが、それでもやはりヴァンパイアだから、少しはそれらしき衣装や化粧が必要。しかしヴァンパイアとライカンの混血であるマイケルをはじめとして、狼になったり、コウモリになったりする俳優たちは大変だ。そして、それをスクリーン上にうまく表現するための美術監督や衣装デザイナーも大変。その大変さの上にこの手の映画が成り立っていることはよくわかるのだが、私としてはそういう方面の努力を、もっと感動的人間ドラマ製作のための脚本づくりに回した方がいいのでは、とつい思ってしまうのだが……。

### 第2作の見どころは？

第2作のストーリーもややこしいから、きちんと理解したい人はパンフレットとつき合わせながらよく勉強することが必要。しかし、そこまでやる必要性は乏しいと私は思うのだが……？ つまりこの映画の見どころは、ややこしいストーリーの理解ではなく、日本人には異質な中世ヨーロッパのアンダーワールドの世界を感じとること。ヴァンパイアとライカンの種族間の抗争はなぜ起きたのか、またヴァンパイアとライカンの混血種という存在はなぜ生まれ、何の価値があるのか、そしてヴァンパイアもライカンも彼らが目指す究極の世界とは何なのか……？ そんなことをいろいろ考え想像していけば、結構楽しいものだし、あなたもすぐにヴァンパイア博士になれるかも……？ 2006(平成18)年3月10日記